

岡倉天心生誕150周年・没後100周年記念

5月18日の大倉山講演会

水谷鉄也という彫刻家

—彫塑会・東京美術学校・大倉精神文化研究所—

大倉山記念館を訪れると、「心の間」を飾る、16体の鶯と獅子の彫刻を見上げることになります。これを制作したのが、東京美術学校教授で彫刻家の水谷鉄也(1876~1943年)でした。近年、日本近代彫刻史の研究が進み、水谷が東京美術学校在学中、1900年の彫塑会展に出品していたことなど、様々なことが明らかになってきました。

彫塑会は、東京美術学校在学生が中心になって企画した、日本で初めてとなる塑像のみの彫刻展です。岡倉天心が深く関わって創設された東京美術学校(現、東京藝術大学)は、当初彫刻科においていたのは木彫部のみであり、塑造部が設置されたのは開校から10年後の1899年のことでした。この一年後に開かれた彫塑会展は、我が国における西洋彫刻の黎明期を語る、重要な出来事だったのです。この時代を生きた水谷鉄也という彫刻家が、晩年の大作である大倉山記念館の装飾彫刻を手がけるに至るまでの道程を追っていきます。

◇日時：平成25年5月18日(土) 午後2時～3時30分(開場は午後1時40分)

◇会場：横浜市大倉山記念館 ホール

横浜市港北区大倉山二丁目10-1 大倉山公園内(東急東横線大倉山駅下車徒歩7分)

◇講師：迫内祐司(さこううちゆうじ)(小杉放菴記念日光美術館学芸員)

◇定員：80名(入場無料、予約なし当日先着順)

◇問合せ：大倉精神文化研究所 電話 045-834-6637

Eメール okuraseishinbunka@js6.so-net.ne.jp

ホームページ <http://www.okuraken.or.jp/>



次回 6月15日(土) 予告

「天心の中の日本と西洋」講師：小林亜紀子(早稲田大学非常勤講師)

主催：大倉精神文化研究所 共催：横浜市大倉山記念館

協力：「天心サミット in 横浜」実行委員会

みずのやでつや

水谷鉄也といふ彫刻家 ——彫塑会・東京美術学校・大倉精神文化研究所

迫内祐司（小杉放菴記念日光美術館学芸員）

水谷鉄也（1876～1943） 略年譜

歎生年／横年齢

1876（明治9）年 1歳／0歳

12月 28日 旧島原藩士の萩民八郎、妻ギンの長男として、長崎県南高来郡島原村（現・島原市）に生まれる。戸籍の名前は「鐵也」。のち、母方の叔父・水谷勝蔵の養子となる。

1887（明治20）年 12歳／11歳

※10月 5日 東京美術学校（以下、美校）、東京市上野に創立。校長・浜尾新、幹事・岡倉天心。

1889（明治22）年 14歳／13歳

※2月 美校開校、彫刻科設置（木彫のみ）
この頃 養父が奈良県の収税属官吏として勤務になつたため、家族で奈良市へ移住。

1893（明治26）年 18歳／17歳

4月 奈良県郡山尋常中学校（現・奈良県立郡山高等学校）に通うかたわら、森川杜園、和田賀水に彫刻・絵画を師事。
10月 奈良県郡山尋常中学校と吉野尋常中学校が合併し、奈良県尋常中学校となる。初代校長に正木直彦。

1894（明治27）年 19歳／18歳

7月 15日 森川杜園、没。独学で修行し、佳園と号す。
※8月 長野宇平治、奈良県庁舎新築の設計および監督のため奈良市に来る。

1895（明治28）年 20歳／19歳

この年 養父が他界し、奈良県尋常中学校を退学。

1896（明治29）年 21歳／20歳

1月 家族は島原に帰るが、一人奈良に残る。一年間程、養父の友人で、奈良県技師の杉文三の養生となる。

1897（明治30）年 22歳／21歳

春 杉文三が鉄道技師として東京転任。ともに上京。
4月 共立美術学校で彫刻を学ぶ。
9月 美校に入学する。
※10月 長野宇平治、日本銀行技師となる。

1898（明治31）年 23歳／22歳

※4月 白井雨山が美校彫刻科助教授に就任、大村西崖が彫刻科授業嘱託となる。白井、塑造科設置を推進する建白書を文部省に提出。

1899（明治32）年 24歳／23歳

4月 生徒成績品展覧会に、彫刻科木彫教室出品の《くま鷹》で一等賞、《蘇武》で二等賞。塑造第一教室出品の《兎》《猫》で一等賞、《鶴》で二等賞受賞。
9月 東京影工会主催第14回影刻競技会に、佳園の名で《木彫姉妹通学置物》を出品。
※9月 美校彫刻科に塑造科新設。

1900（明治33）年 25歳／24歳

5月 第1回影塑会展に《老翁肖像》《婦人》《愛嬌娘》出品。後の妻、秋山もみじ（本名ゑつ）も出品。



《婦人》

第1回影塑会展

1901（明治34）年 26歳／25歳

4月 第2回影塑会展に《溫和》《肖像》を出品。
※8月 正木直彦、美校校長に就任（～1932年3月まで）。

1902（明治35）年 27歳／26歳

7月 美校彫刻科を卒業。卒業制作は石膏《愛之泉》（東京藝術大学所蔵）。同期生に、高村光太郎、山本寅一、細谷三郎ら。水谷は卒業後、同校臨時雇いとなる。
8月 東京影工会主催第17回影刻競技会に《石膏製彫刻みをつくし》で豪状一等受賞。
9月 美校が農商務省から依嘱された、第5回国勅業博覧会美術館前の観音噴水制作のため、大阪へ派遣される。噴水は、設計図案を河辺正夫、主任を高村光雲、監督を黒岩淡哉が担当し、彫刻科卒業生として水谷ほか、渡辺長男、青木外吉、山崎和沾が制作に従事。

またこのとき、奈良時代に旧知の建築家・長野宇平治と再会。長野は日本銀行大阪支店新築の技師長として来阪。水谷に同銀行装飾が依頼され、11月から翌年1月にかけ、貴賓室・装飾室内の装飾彫刻に従事（竣工は翌年）。これを機に以後、長野が設計する建築の装飾彫刻をたびたび手がける。

この頃 秋山ゑつと結婚。

1903（明治36）年 28歳／27歳

3月 美校雇い（彫刻科助手）となる。
7月 美校へ依嘱された第一高等学校お雇い外国人教師アリヴェーの胸像制作が学内で募集され、応募する。
9月、甲（頭部像）の部、乙（石台つきの胸像雛形）の部で二等賞となる。
10月 三四会の課題制作《死》を発表か。

1904(明治37)年 29歳/28歳

4月 美校彫刻科助教となり仮入学者の彫塑授業補助を担当。
4月 日本美術協会第35回美術展に《石膏製裸体婦人像》で三等賞銅牌受賞。
9月 美校彫刻科の授業嘱託となる。

1905(明治38)年 30歳/29歳

3月 美校予備科、新入学生の塑造授業の担当となる。
5月 第1回彫塑同窓会展に《落人》《恍惚》を出品。
12月 美校彫刻科助教授に就任。

1906(明治39)年 31歳/30歳

この年 東京影工会主催彫刻競技会の審査員となる。
この年 美校依嘱制作《長岡護全騎馬像》が、熊本市水前寺公園に竣工。原型制作主任は高村光雲。原型制作担当は水谷、白井兩山、黒岩淡哉。
11月 美校依嘱制作《西村勝三像》が、東京市向島墨堤下で除幕。担当は長岡像と同じ。

1907(明治40)年 32歳/31歳

3~7月 東京勧業博覧会に《石膏乙女》で三等賞牌受賞。

1908(明治41)年 33歳/32歳

9月 九段の暁星学校でフランス語を学んでいたとき、同校で田辺孝次と出会い、親交を深める。
10~11月 第2回文部省美術展覧会(文展)に《ねむり》で初入選。



《夢幻》
第3回文展

1909(明治42)年 34歳/33歳

10~11月 第3回文展に《夢幻》で入選。

1910(明治43)年 35歳/34歳

夏~秋 留學費用にあてるため、新築の帝国劇場内の装飾彫刻に従事。田辺孝次に奇遇してもらい助手とし、留学中留守宅をまかせる。
11月末 ヨーロッパ留学にむけ、新橋駅発の汽車で出発。途中、島原に一週間ほど滞在。石膏《少女半身の像》を島原高等小学校に残す。
12月 門司港から出国。
年末 納品した帝国劇場装飾彫刻が不充分な出来であったため、修正を命じられる。水谷は渡仏してしまっていたため、代わりに沼田一雅がこれを担当する。

1911(明治44)年 36歳/35歳

1月末~4月 パリでテラコッタを研究。
5~6月 アカデミー・ジュリアンでベルシエに師事。
8月下旬 フランスのブルターニュ地方を旅行。

1912(明治45/大正元)年 37歳/36歳

7月 ブルターニュ地方を旅行。
※7月 長野宇平治、日本銀行技師を解職。

1913(大正2)年 38歳/37歳

※2月 長野宇平治、建築事務所を設立。

※3月 田辺孝次、美校彫刻科を卒業。
4~6月下旬 イタリアを旅行。ローマ、ポンペイ、ナポリ、ヴェネツィアなどをまわる。
7~10月 フランス、ドイツを旅行。
※9月2日 岡倉天心、没(1863~)
10月24日 帰国にむけ、ロンドンから出港。帰路、インド、ジャバのボロブドゥ寺院のズール旧蹟を見学。
12月末 神戸入港の日本郵船宮崎丸にて帰国。

1914(大正3)年 39歳/38歳

1月 東京市本郷区駒込神明町36にアトリエを新築し、転居する。田辺孝次、動坂町116番地の借家に移る。
3~7月 東京大正博覧会に《女の頭》《スペイン踊子》《ブルターニュ婦人小刀磨き》出品。
※6月 サラエボ事件(第一次世界大戦へ発展)
10~11月 第8回文展に《髪洗》《婦人頭(女の頭)つた女》で入選。
12月 恵兵美術展に、《小刀研ぎ》《うたうね》《やすみのひま》《女》《姉妹》《踊子》および、留学中に集めた「仏国キヤンペール焼の鉢」を出品。
12月 通信省内博物館に《下村房次郎像》落成。



1915(大正4)年 40歳/39歳

3月 小林萬吉滞欧作品展に、旧作7点を特別出品。
3月末 自宅隣に駒込彫塑研究会を新築。通信教授部も創設。5月から田辺孝次と共に授業開始。
4~5月 第3回国民美術協会展に、《某氏の肖像》《果物》《習作》を出品。
5月 《ウィリアム・ヘンリー・ストーン像》、通信省内博物館に設置。
5月 駒込彫塑研究会にて、《麗銀蘭陵王童舞置物》《姉妹》《鏡音》など室内装飾装十数点および、田辺孝次の彫刻、寺崎広業、和田英作、川井玉堂、石井柏亭、町田曲江らの絵画作品などを展覧。
9月 第一回黒耀社展に《老嫗の顔》《スフィンクス》《希臘時代小童の模造》《S氏肖像》《鏡音》など出品。
10月 第9回文展に錆銀《蘭陵王童舞》が入選し、《休息せるモデルに題材を得たる少女像》が落選する。
※12月 田辺孝次、志願兵として一年間第一師団入営。

1916(大正5)年 41歳/40歳

2~3月 第4回国民美術協会展に、《新月》を出品。
11月 第2回黒耀社展に、《或老人の像》《リビエール原作「黎明」模刻》《S氏肖像レリーフ》など出品。
11月 装飾彫刻を手がけた《三井銀行神戸支店》(設計=長野宇平次)が神戸市に竣工。
11月 《成清博愛翁立像》完成。1917~19年頃、大分県立石の馬上公園に竣工。

1917(大正6)年 42歳/41歳

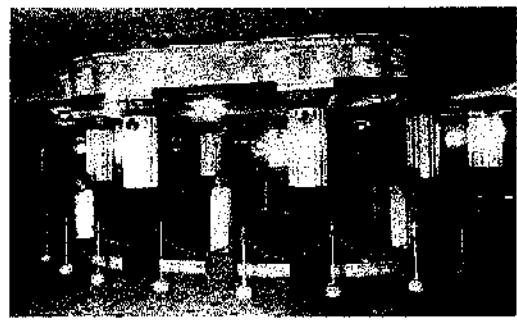
2月 第5回国民美術協会展に《老人》を出品。
2月 東京市本郷区駒込神明町54の新居に転居。
※8月17日 岩村透、没(1870~)

1918（大正7）年 43歳／42歳

4月 美校図画師範科手工（木彫・塑造）兼任となる。
 ※11月 田辺孝次、美校美術史研究室助手となる。
 12月 美校彫刻科教授に就任。

1919（大正8）年 44歳／43歳

※6月 ヴェルサイユ条約。第一次世界大戦終結。
 7月頃 装飾彫刻を手がけた《横浜正金銀行神戸支店（二代目）》（設計＝長野宇平治）竣工。
 ※8月30日 田辺孝次、美校助教授に就任。
 11月頃 装飾彫刻を手がけた《横浜正金銀行下関支店》（設計＝長野宇平治）竣工。
 この年 美校依嘱制作《山形仲芸博士像》、東北大学で除幕。石台工事監督もつとめた。



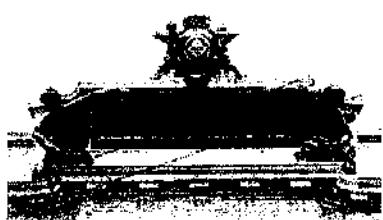
明治銀行本店中庭の噴水

1920（大正9）年 45歳／44歳

※2月 建畠大夢、美校彫刻科教授に就任。
 9月 田辺孝次の妻が亡くなり、この頃から水谷・田辺は疎遠となり、美校で話をする程度になる。
 ※11月 白井雨山、美校を退官。
 12月 美校彫刻科理事となる（翌年6月まで）。
 この年 新潟県岩船郡（現・関川村）の《関谷村忠魂碑》を制作。

1921（大正10）年 46歳／45歳

3月 第1回搖籃社彫塑展。水谷と弟子による展覧会。森正馨、木内五郎、山本金三郎、木内正、三浦舜太郎、吉川保正、斎藤又乙、小笠原貞弘、日高豊彦、幸崎伊次郎、簡野福四郎、中川清、児島矩一が出品。
 ※5月 朝倉文夫と北村西望が、美校彫刻科教授（塑造実習担当）に就任。
 5月 美校彫刻科実習担任を免ぜられ、鑄造科塑造実習並工芸部予備科の彫刻担任、師範科手工（塑像及木彫）、図案科第二部の塑像実習担任となる。
 5月 国民美術協会彫塑部理事就任。
 9月 装飾彫刻を手がけた《三井銀行日本橋支店》（設計＝長野宇平治）、東京市日本橋区南茅場町23番地に竣工。
 11月 第4回国民美術協会小品展に《少女》を出品。
 11月 美校金工科の塑造実習担任兼務となる。
 12月 教え子らと曠原社を結成（1924年解散）。



《三井銀行日本橋支店装飾彫刻》

1922（大正11）年 47歳／46歳

2月 曠原社の幹事に就任。
 3～7月 平和記念東京博覧会の住友館正面を、水谷が制作した《天女装飾》が飾る。

1923（大正12）年 48歳／47歳

5月 曠原社研究所落成記念試作展に出品。
 6月 国民美術協会彫塑部評議員および理事に就任。
 8月 装飾彫刻を手がけた《明治銀行本店》（設計＝長野宇平治）が、名古屋市に竣工。

1924（大正13）年 49歳／48歳

4月 《シーボルト像》、長崎市鳴滝にて除幕式。
 ※11月 田辺孝次、欧米留学に出発（1927年1月帰国）。

1925（大正14）年 50歳／49歳

6月 第11回国民美術協会展影塑部に《髪》を、建築部に《建築装飾雛型》《同像石膏模型》を出品。
 12月8日 実父が亡くなる。
 この年 装飾彫刻を手がけた《大屋邸》（設計＝長谷部銳吉）が竣工。

1926（大正15／昭和元）年 51歳／50歳

※3月 大倉邦彦、秘書の原田三千夫を連れて図書館視察のため渡欧。
 ※3月31日 高村光雲、美校退官。6月16日名誉教授。
 4月 装飾を手がけた《六十八銀行奈良支店》（設計＝長野宇平治）が竣工。
 5月 第1回聖徳太子奉讃美術展に《黙》を出品。

1927（昭和2）年 52歳／51歳

6月 明治大正名作展に《ブルターニュ婦人の小刀磨き》を出品。
 6月30日 装飾を手がけた《横浜正金銀行東京支店》（設計＝長野宇平治）が、東京市日本橋区に竣工。

1928（昭和3）年 53歳／52歳

※2月頃 大倉邦彦による図書館が横浜市太尾山上に建設決定。
 ※3月末～4月初旬頃 大倉精神文化研究所の設計が、長野宇平治に依頼される。4月より設計開始。
 ※6月 長野宇平治設計《大倉洋紙本店新館》起工。
 ※7月11日 大倉邦彦、長野宇平治、荒木孝平、原田三千夫による、大倉精神文化研究所建築第一回会議。

1929（昭和4）年 54歳／53歳

※9月30日 大倉精神文化研究所の本設計完成。工事請負は竹中工務店に正式決定。
 7月 水谷が監督した《松本莊一郎像》《平井晴二郎像》《ジョセフ・クロフォード像》、札幌停車場前で除幕。
 10月 《広井勇博士像》、北海道小樽市で除幕。
 12月17日 大倉精神文化研究所地下一階に埋めるブロンズ製《礎碑（留魂碑）》制作を水谷に依頼することが決定。

1930（昭和5）年 55歳／54歳

2月4日 創作中の《礎碑（留魂碑）》を、大倉邦彦、長野宇平治らが見にくる。
2月23日 大倉精神文化研究所宛に、《礎碑（留魂碑）》制作費621円のうち、内金600円の請求書を発行。
3月 第2回聖徳太子奉贊美術展に《をんな》無鑑査出品。
4月9日 大倉精神文化研究所地下で《礎碑（留魂碑）》を埋設する鎮礎式。
4月12日 大倉精神文化研究所宛に、《礎碑（留魂碑）》制作費621円のうち、残金21円の請求書を発行。
4月23日 大倉精神文化研究所建築のための第9回協議会にて、車寄せの破風彫刻原型を水谷に依頼することが決定。
5月 長野宇平治の事務所より、大倉精神文化研究所の装飾彫刻制作の依頼を受ける。殿堂入口上のブロンズ《聖徳太子等身大座像》、玄関車寄せの石彫、広間上部に設置するテラコッタ16点の見積もりを発行。
5～7月頃 大倉精神文化研究所の殿堂入口上部に設置予定だった《聖徳太子胸像》の計画が中止。
8月22日 《平岡定太郎翁像》、樺太神社にて除幕。
10月 第11回帝国美術院展（帝展）に《眠》で入選。



《荒木克業大尉像》

1931（昭和6）年 56歳／55歳

4月 《白浜徵像》（1927年作）
が、美校校内に建立。
4月9日 大倉精神文化研究所の上棟式。



大倉山記念館「心の間」の獅子・鶯像

7月 《獅子・鶯》16点を大倉精神文化研究所に納品。
7月15日 大倉精神文化研究所宛に、
テラコッタの請求書を発行。

8月19日 大倉精神文化研究所宛に、玄関車寄せの破風装飾彫刻の石膏原型制作費500円の請求書を発行。

※9月18日 滿州事変

1932（昭和7）年 57歳／56歳

3月 《根津嘉一郎翁寿像》、山梨県万力公園にて除幕。
4月9日 大倉精神文化研究所（現・大倉山記念館）の竣工式。研究所開所。

8月 美校图案科理事を免ぜられる。

11月 美校彫刻勤務となるが、建築科及び図画師範科の塑像実習授業の担当となる。

11月 《塙保己一像（小）》を東京・温故館へ寄贈。

1933（昭和8）年 58歳／57歳

1月 《鈴木利平先生像》、甲府市師範学校内（現・山梨大学）にて除幕。

3月31日 美校を依願退職。

この年 《荒木克業大尉像》、千葉県荒木山に竣工。

1934（昭和9）年 59歳／58歳

3月 《鈴木茂治翁像》、山梨県小笠原小学校（現・櫛形町立小笠原小学校）にて除幕。
3月31日 江の島入口の大鳥居に、水谷制作の《青銅製御神号額》が納められる。
5月 大礼記念京都美術館美術展に《忠烈荒木大尉》出品。
この年 《肉弾三勇士 作江伊之助伍長像》長崎県平戸町、《肉弾三勇士 北川丞伍長像》長崎県佐々村に竣工。

1935（昭和10）年 60歳／59歳

11月 《救世軍軍平翁寿像》（東京・神保町、救世軍本営）を制作。
この年 水谷が設計した石彫《狛犬》が、長崎市諫訪神社に奉納される。石工彫刻は橋口才造。

1936（昭和11）年 61歳／60歳

12月 《沖禎介像》、長崎県平戸町で除幕。

1937（昭和12）年 62歳／61歳

※7月7日 蘆溝橋事件。日中戦争へ発展。
10月 《橋村徳一翁寿像》、愛知県盲啞学校（現・愛知県立名古屋聾学校）に竣工。
この年 《乃木希典像》、神奈川県片瀬海岸に竣工。
※12月14日 長野宇平治、没（1867～）

1938（昭和13）年 63歳／62歳

11月 《塙保己一像（大）》、東京・温故学会で除幕。
この年 《中倉万次郎翁像》（長崎県平戸駅前）、《松浦詮公像》（長崎県平戸町亀岡城）、《乃木將軍像》（朝鮮全羅北道郡山公立小学校）など制作。

1939（昭和14）年 64歳／63歳

4月 《理学博士牧野富太郎翁寿像》制作。
この年 《春日野テラコッタ作品》長崎県傷痍軍人小浜温泉療養所（現・雲仙市小浜町）制作。

1941（昭和16）年 66歳／65歳

※12月8日 真珠湾攻撃。太平洋戦争へ発展

1943（昭和18）年 68歳／66歳

8月31日 駒込の自宅にて没。没後、自宅が空襲により焼失し、多くの作品が失われる。

文献資料 ※()おとび下線部は発表者注記

①吉田三郎、澤田政廣、杉浦藤太郎、森野國象「朝倉文夫先生に想い出話を聞く」『彫塑』21号、日本彫塑家俱楽部、1955(昭和30)年1月

澤田：〔東京美術学校では〕水谷先生とか黒岩〔淡哉〕先生なんかが居りましたね。

水谷先生は余りおとなしいんで学生の方が積極的になって大分先生をやり込めたりした。

吉田：後に水谷先生は工芸の方に変られたが、その奥さんは秋山もみじと言つて女流彫刻家だつた。

②水谷鉄也「長野〔宇平治〕先生の靈に捧ぐ」『建築雑誌』52輯 636号、1938(昭和13)年3月

初めて先生にお目にかかつたのは、奈良県奈良町で、大学を卒へられてから一年過、奈良県庁の嘱託となられた時である。私は此時同県技師杉文三氏宅に御世話になつて居た。先生は奈良県庁舎新築の設計監督の為めに来られたのであつて、私を知つて下さつたのは、奈良に彫刻界空前の巨匠森川杜園翁が居られた。此翁は明治二十七年七月十五日に七十五歳で永眠しました。先生の就任は此年の八月で翁の死一月あとであつた。私は奈良県郡山中学生たりし傍ら、此翁に師事して木彫や絵画を学んで居つた。翁は其秘蘊を開いて指導して下さつた。その事の懇情は心魂に徹する次第でありましたが、遂ひに死別の悲を見るに至りました。幸ひに其秘書や遺された絵画等は私に下されたので其意思を受けて研究して居りました。先生は時々御出になり彫刻して居る処を御覧になつて居つた事が私を知つて下さつたのだと思ひます。

さて先生は奈良には古建築が沢山あり其周囲の風物皆古都を思はせるものに充ちて居りますので、其関係上、之れに適合した県庁舎を設計せられたのであります。二十八年十二月に県会議事堂と共に竣工されました。翌年は奈良県立師範学校も建てられました。(中略) 県庁では先生を永く置きたい者へだつたそうですが、先生はお断りになりました。次に杉技師も三十年に鉄道技師として東京に転任せられました。私もお供しまして、東京美術学校に入学したのであります。

明治三十五年私は美術学校を卒業すると命ぜられて、当時大阪博覧会〔第5回内国勧業博覧会〕の大噴水の觀音像を造りに行って居りました。此事が新聞に出たので、長野先生は此時日本銀行大阪支店新築の技師長として来て居られ、此奴は奈良で会つたやつだなと思はれたとの事で來訪して下さつた。其時の私の喜びは如何程であります。其上同支店の裝飾をやれとのお言葉であります。これが私の建築裝飾をした初めであります。帰京後私は東京美術学校の教師となり三十一年間最近迄勤めましたが、此学校にも裝飾彫刻の必要を感じて初めてさせる様にしたのも此時であります。此間先生の設計せられた建築裝飾の主なるものは私の手で致しましたのであります。

大正四年には三井銀行神戸支店の裝飾、正金銀行下関支店の裝飾をなし、大正九年に三井銀行日本橋支店の正面の紋章を現せる楯飾及左右童子形及正面標札の左右人像は青銅造りで私の作であります。大正十一年明治銀行本支店の裝飾も致しました。其内本店の地階中庭は伊太利ポンペイ旧趾中住家のアトリウム式を取つて設計されたもので六柱を以つて囲まれた噴水池を設け童子銅像より噴水池の周囲にテラコッタにて六神像を配置したのである。こんな大きなテラコッタは当時初めて出来たものだと思ひます。先生の創意で中々立派なものと思ひます。横浜正金銀行東京支店の建物は壮大なものをしたいとの事で米国に迄も研究に行かれましたが、又私にもそう云ふ目的で日本一大石彫の破風を飾りたいと難型迄作らしめられました。かく段々進行して居りましたがあの大震火災の為めに設計変更となり今の姿となつたのであります。

昭和六年四月竣工の大倉精神文化研究所は大倉邦彦氏が眞の世界文化の為め世道人心を向上させ、指導せんものと、宗教的信念に基き健全なる国家を確立せんとの目的で、私財を投じて建てられたので、先生の設計になる此建物は優壮高潔の表現を第一に感じるもので、プレヘレニツク式と東洋古風の様式に現代の要件を加味した、其和合の美は嘆賞に値する。四方の光を受けて感謝に充つる眞の人間が次々に此處から生れ出ん事を望むと同時に建主と設計者に御礼を申す次第である。此建物の裝飾は特に私にと命ぜられ皆様のお名の次に私の名前迄も刻し込んで地下記念銅柱を埋蔵されてあるのであります。

③水谷鉄也「美術家の眞面目な研究と愛護者」『美術旬報』6卷14号、1918(大正7)年6月

時代の要求として建築ばかりしてこれに装飾のない事も一つの欠点である。これ等の欠点は其作家の創造力に欠点のある事である。其表現の程度は作家其人の趣味の問題に帰著する。無学無智の趣味の人々は只日の当りの自然のそれを自然として表面の形体を、しかも未熟の腕を以て写すのである。それは如何にも見られたるものでない。吾々人間の使命はこんな甘い味の者ではあるまい。(中略)併しながら建築の装飾には其装飾が独立して只自然を写して(画家が自然に対して画を作る様に)作つたなら誤りである事を断つて置く。自然の真意が加味されて建築と合致したところに眞の藝術的価値がある。／自然を洞察し、感じた作は眞実であると共に又威壓である。自然の眞の理解がないものは力なく、味ひのないもので終る。即ち人のそれに対する趣味の不足である。／我等作者と一般社会の人々は共に大覺醒する時が來た。古來の日本美術は彼等歐洲近代美術に大なる教訓を与へて個人的表現を為すに至つた。其後諸流派は滅亡に近づきつゝある。そして只自然に対しての眞の理解から其人の頭に生れ出たものゝ表現となつて益々此道に活動を始めつゝある。現今之我日本の作家が此彼等欧人の作が如何にして斯の如き發達を為せしかの真意を解せずに若し其出来上つた欧人の作品に力を得て進まうと思ふ様な意志、愚劣な氣性があつては到底世界の美術家とはなれまい。自分は諸展覧会を見、比較研究する時にはいつもこんな感じがしてならぬ。

④水谷鉄也「現代人と作家へ」『工芸通信』1卷5号、1922(大正11)年9月

古のローマの都では彫刻やバーズやを家屋や庭園に飾るのが習慣の様になつて居つた。ポンペイの家の如何なる小屋でも装飾のない所はない。其彫刻、絵画、モザイク、貴金属の作品、陶器、椅子、寝台、掛布等皆美しい。其他日常使用する家具に至つても美術的なもので充ちて居る。しかもこれ等總体を通じ一貫した韻律を有して居る。これ等は即ち此時代人が其生活にあまり單純であつたのでなく、楽しい変転の調子を喜んだ愛の結晶であるのだ。吾々は我家を先づ自分の趣味性と時代とに適合して作り上げねばなるまい。

⑤長野宇平治「裝飾士の独立を望む」『建築世界』15卷11号、1921(大正10)年11月

従来は建築士の設計方針の下に働いて装飾と称する部分を担当すべき装飾士がなかつたのである。是迄海外に学んで來て装飾士の仕事を営まんとする者二三ないでもないやうであるが、独立して門戸を張つて業務を営まうと云ふ人もない様に思はれる(中略)装飾士の担当する業務は大略どんなものかと云へば、建物の出来上がるまでに、他の工事と同様に建築士の定めたる設計方針に従つて室内の仕上の工事、但し特に装飾のある仕上工事例へば壁、天井、床及び造作物の実行設計をして其等の工事の請負人をして実行せしめ監督すると云ふことが装飾事業の第一である。(中略)建築装飾は今日の如く複雑になつて來た時代には殆んど建築士と同程度の智識を有する装飾士がなければならぬ。装飾士の資格としては建築士と同じく建築歴史をも知らなければならぬ、又現代の世界の建築状態をも常に注意して、世間のヒトの時好流行の状況をも絶へず視察して、建築物に適當した装飾の衣飾を施さなければならぬ、又其設計を実行するに當つての材料及施工上の智識をも持たなくてはならぬ。殊に衣飾設計を示すべき図案の技両をも充分でなければならぬ。

⑥杉江宗七、山口廣、神代雄一郎「座談会 近代建築史のなかのテラコッタ」、杉江宗七監修『建築のテラコッタ』

INAX、1983年 ※杉江は元伊奈タイル工事社長(1932年伊奈製陶入社)、山口は工学博士、日本大学教授。

山口：(前略)一品製作のテラコッタの場合、有名か無名かは別として、彫刻家に原型を依頼するようなことはあつたのでしょうか。

杉江：ええ。瀬戸や陶器学校があつて、そこの模型科で彫刻を教えていたのですね。そういうところを出た彫刻家の弟子の弟子ぐらいの者——私も含めて——が原型づくりをやっていたわけですが、コリント式のアカンサスの葉のつくり方とか、唐草のアルのつけ方とかになると、本格的にはわからないので、いってみれば見よう見まねなんですね。建築家の方は図面だけつくればいいけれども、私どもはそれからがたいへん…。(笑)／しかし、大正の終わりから昭和初期までは、あるいはそれ以前からか、美校の出身者、あるいは当時芝浦にあった高等工芸の工芸彫刻科を出た方が、わりあいきちんと仕事をしていたようです。いまはそういう人はいないので、その都度外部に頼むほかない。